



武藤光史さん。観賞用のハゼリソウ「アンジェリア」(雪印種苗)の前で。幼稚園に勤める奥さんに「子どもたちのために花を育てて」といわれて栽培した。もうじき枯れるが、茎葉は、花畑の間に植えたカボチャやスイカなどの敷ワラ代わりに使うつもりだ

農業が
おもしろくなる
私の
情報活用 **11**

心がまえから作業まで
「ルーラル電子図書館」は
団塊帰農の応援団

静岡県三島市・武藤光史さん

編集部

武藤光史さん、五年前から両親に代わって土日イネつくりをはじめ、二年前に三島市の職員を五五歳で退職して、イネ+多品目野菜づくりの農業を歩みはじめた。団塊世代の新米農家は「ルーラル電子図書館」からひき出した農家の工夫や知恵に刺激され、アレもコレもやってみたいと、張り切っている。

めざすは「おすそわけ農業」

退職して半年間、武藤さんは、どんな農業をめざすか、いろんな本や「ルーラル電子図書館」の記事を読みながら考え続けた。農業の心構えや方向を決定づけた本として武藤さんがあげてくれたの

は、守田志郎さんの『小農はなぜ強いのか』(農文協発行)と、マーケティングプランナー・宮澤昌子さんの『小さい農業だから、できること。すべては続いたために』(社)静岡県茶業会議所発行)の二冊。両者とも書名に「小」の字が入っている。自由で楽しい小さい農業。それは自給を基本にしているんなものをつくり、おすそわけしてお金も得るやり方だ、と武藤さんは心にきめた。

作付けはイネ九反、露地の野菜・花三反。米の消費量は一人年間約一俵だから、反九俵とれば一反で三大家族三戸の米が賄え、九反で二〇〜三〇戸の固定客がいればいいことになる。そのお客に年間通して野菜や花も届ける。五〇〜六〇種類はつくりたいという。栽培が安定するまでは農協の直売所に出荷するつもりだが、めざすは、地域の住民二〇〜三〇家族への「おすそわけ農業」だ。

そんな武藤さんが「ルーラル電子図書館」の会員になったのは二〇〇二年九月。それ以来、約二年半で四〇三三四ページ分の記事を読んだ。「現代農業」二三四七



「どんコシ」「ジャガイモの植え付け」「太陽シート」...近々の作業にかかわる大事な記事は壁に



大坪さんの記事はファイルして一冊に

ページ、「農業技術大系」一一二〇ページ、「病害虫・雑草の診断と防除」二九三ページ、ほかに内山節さんや守田志郎さん関連の「農村文化運動」の記事も読み、ファイルにとじている。

「新規就農者にとって『ルーラル電子図書館』は宝の山です」と武藤さん。「おすそわけ農業」にむけて、早くもいろんな取り組みや工夫が始まった。

おいしい米、豊かな景観

まず、イネの話。これまでは、県の奨励品種「あいちのかおり」一本だったが、

今年には品種構成をガラリと変えた。九州の良食味品種ヒノヒカリ、低アミノ酸で粘り・光沢が良いミルキークイーン、そして「どんコシ」の三本立て。お客においしさとともに、品種による味の違いも楽しんでもらおうというねらいだ。「どんコシ」は、兵庫県・大前勉さんの「どんコシ」混植でつくる自分だけの米（二〇〇三年二月号）の記事をみての挑戦。短稈のどんこいといと、「コシヒカリ」の種子を混ぜて育てると倒伏しにくくなる。

これまでいい加減に耕していた田んぼ

は、「土寄りさせない、ワラを浮かせない耕耘・代かき法」（一九九五年五月号）や、故井原豊さんの「二山盛りのツメの配列で全作業をこなそう」（一九九〇年八月号）などの記事を参考にし、育苗では太陽シートを使い、四五株の疎植にして、「への字稲作」をめざす。米又力除草も試験してみるつもりだ。

現在、レンゲ稲作に取り組んでいるが、本誌連載中の赤木歳通さんが取り組んでいる「菜の花稲作」も、やってみたいという。都市近郊に、子どもたちも喜ぶ豊かな農村風景をつくりたい、という気持ちもある。

直売母ちゃんの工夫が一番

もつひとつの柱、多品目野菜づくりも「ルーラル電子図書館」が頼り。とりわけ、直売所むけにいろんな野菜をつくる母ちゃんの工夫が、「信頼できるし、こまかい作業のしかたもわかり、大変役だつ」という。分厚い家庭菜園の本を買ったりもしたが、今は見ることもない。

なかでもお気に入りには岐阜県・大坪夕



田の耕耘法の工夫を集めた「トラクター」井原豊さんの記事を中心にした「米作り」、赤木さんの記事を集めた「赤木歳通」、「農村文化運動」誌の記事を綴じた「内山 節」。ほかに「レンゲ稲作の魅力と不安」「田の草図鑑」、「ここまで知らなきや機械で損する」など、自分用の記事集（本）が本棚に並んでいる



大坪さんの記事をヒントにつくったすじ付け器

希栄さんの連載記事「畑は小さくてもアイデアいっぱい」（二〇〇四年一〜十二月号）だ。連載以外の記事も含め、大坪さんの記事はすべてパソコンからプリンとして一冊のファイルにしている。記事を開くとあちこち赤線が引いてあり、作業のポイントとなる個所がすぐにわかるようになっていて。四月号の「ダイコン、ニンジン」：畑でタネをまいたら鎮圧すべし」を読んで、早速播種のためのすじ付け器を手づくりした。「私の気持ちのアピールするラベルをパソコンで」

（二〇〇二年七月号）に刺激されて、出荷袋に貼るラベルもつくった。

大坪さんは、「ルーラル電子図書館」と同じく過去の記事を収録した「現代農業CD ROM」を活用し、いろんな工夫を積み重ねているが、そんな大坪さんの工夫を、新米農家の武藤さんが参考にする。農家から農家への知恵や工夫の伝播が、電子の活用によって、大変やりやすくなった。

井原豊さんの奥さんの英子さんの連載「主人がくれた宝物 菜園づくり 今月

のびっくりアイデア」（二〇〇二年一〜十二月号）も好きな記事の一つ。パソコンがおいである武藤さんの書斎の壁には、「どんコシ」などの記事とともに、井原さんの「春ジャガイモの植え付け」の記事が貼ってあった。

経験不足を「情報」で補う

「電子図書館」は、検索コーナーに言葉を入力して記事を引き出すやり方が中心。「毎月の『現代農業』や農文協の農業書を読んで、もうちょっと調べたくな

『ルール電子図書館』 無料体験受付中!!



大坪さんの記事に刺激されてつくった野菜のラベル。インターネットで公開している「ラベル屋さん」という無料ソフト (<http://www.labelyasan.com/>) を利用

ハゼリソウの花畑の間に植えたマクワウリ。ネギを混植した

ってパソコンに向かうことが多い」と武藤さん。「現代農業」の気になる技術をキーワードで調べる。登場する農家の名前で検索することもある。農業実用書で栽培全体の仕組みや作業の意味がわかってくるのと、「現代農業」の農家の技術をよりよく理解できる。

そんな武藤さんにとって、また一つ大きな武器が生まれた。今年二月号の七〇〇号記念企画・『現代農業』用語集』である。武藤さんから、こんな感想文が寄せられている。

農業のスタートラインに立つ私にとって「現代農業」で紹介される、農家のいきいきとした暮らしや、長年にわたり磨き上げられた知恵や技術を学ぶことがたいへん役立ち、心強く感じています。しかし、記事中には、初めて目にする言葉や内容を正確に理解できない用語がたくさんあるのも現状です。

今回の用語集の企画は、単なる用語解説ではなく実際に家にとつてのガイドになっています。たくさん事例の中で混乱

したり迷ったりしていますが、ここでは具体的な事例を背景にうまく整理され全体がわかるように解説されており、さらに、踏み込んで調べるための手がかりもあります。

農家が実際に利用する目線から解説されていて、私のような入門者にとってありがたい内容です。

技術の意味合いを把握しイメージをもつことで、先輩農家の技術や工夫をよりよく学んでいく。こうして経験不足を補いながら、どんどんいろんな挑戦をして自分の農業を築いていきたいと、武藤さんは考える。

「毎年やり方を変えると、何がよかったのか、わからなくなってしまうかもしれない。でも、いろいろやってみたい。時間も無限ではない」

「ルール電子図書館」は、そんな武藤さんの濃密な第二の人生を励ます応援団なのだ。

一〇日間一〇〇ページまで体験できます。お申込みは、巻末のハガキで。